

哲学のサブジェクト転換

——ポスト近代社会における「レジリアンな個」の再生——

京都大学 齋藤直子

ドイツの社会学者ベックは、ポスト近代、ポスト産業社会を「危険社会」(1992/1986; 邦訳 1998)として特徴づけている。ベックが例証するように、諸々のグローバルな危険のネットワークは、危険管理や危険最小化、危険監査によってはもはや安全が保証されえない事態を生み出している。同様に、日本の哲学者村田純一も技術倫理の分野で、技術開発における「失敗への健全な恐れ」の必要性を指摘し(村田 2006)、福島原発事故後も流布する「安心安全神話」の言説に警笛を鳴らす(村田 2013)。ベックも村田も共に、科学技術やテクノロジーが飛躍的に進化した現代社会においては、危険を抑制し回避することでなく、危険と共に不確実性の中で生きる新たな思考様式を人類が求められていることを我々に喚起する。そして両者は共に、危険社会を生き抜く市民の批判的思考力の育成と市民的徳に支えられた共同体の形成を訴える。本発表では、「危険社会」を生き抜き、それを超えるためにポスト近代社会に求められる代替的な批判的思考と主体のあり方を、哲学と教育の学際的見地、「教育としての哲学」(philosophy as education) (Saito and Standish 2012)の観点から提唱することを試みる。不安に駆り立てられるディストピア的連帯に根ざす「危険社会」の危険(risk)を、希望への転機、再生への契機としての危機(crisis)に転換するために、今、いかなる哲学の思考が求められているのか。この問いに答えるべく、本発表は生き方としての哲学に求められる代替的な批判的思考を提唱すると同時に、それと不可分なものとして、西洋近代の自律的主体を超える代替的主体を「レジリアンな個」として提言する。哲学の主題としての理性を置き換え、哲学が扱ってきた主体を置き換えるという二重の意味で、この試みは「哲学のサブジェクト転換」(Re-placing the subject of philosophy)の思考実験である。

この思考実験の手がかりを与えてくれる現代思想として、本発表では、(1)イギリスの教育哲学者ポール・スタンディッシュが『自己を超えて：ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』(2012)で提示する、慎み深さと他者への受容性に特徴づけられる自己超越的主体と代替的なリベラル・エデュケーションの思想、および、(2)アメリカの哲学者スタンリー・カベルによる、19世紀のアメリカ超越主義者、エマソンとソローの思想の日常言語哲学の視点からの再解釈——危機からの再生の学としての「夜明けの哲学」(Cavell 2005; カベル 2005)——から導き出される強靱な個の思想の可能性を紐解く。(カベルは、アメリカ哲学の代表とされるプラグマティズムの問題解決的思考様式を超えるところで哲学を実践性と日常性に回帰させるべく、もう一つのアメリカ哲学の思想系譜を復権させる。)スタンディッシュとカベルは共に、近代と「ポストモダン」、リベラリズムとコミュニタリアニズム、公と私、公共圏と親密圏、正義とケア、男性的なものと女性的なもの、といった二項対立的論争の思考枠組みと言語の限界を超え、「基礎づけることとして発見すること」(finding as founding)(Cavell 1989)という反基礎づけ主義の完成主義——究極的完全性なき完成主義——の、途上にあり続ける思考様式を徹底させる。そして両者は共に、アメリカ哲学とヨーロッパのポスト構造主義の英知を架橋する中で、互換性、相互性、透明性、アカウントビリティに依拠する批判的思考の様式を揺さぶり、可視的なものと不可視的なもの、語られるものと語りえぬものの境界に立ちつつ思考する「過剰な思考」(exceeding thought)を言語実践する。それは西洋近代哲学から継承される思考の力を維持しつつも、日常性の超越(transcendence in the ordinary)、「下向きの超越」(transcendence downward)(Standish 2012, p. 25)、さらには来るべき未来に向けて跳躍する「前向きの超越」(transcendence forward)を通じて、自律的主体概念を超える自己超越思想である。また、危険を回避し制御するのでなく、不確実性を引き受けて投機するリスクテイク(危険負担)の思想でもある。ここにおいて危険を危機に転じる批判的思考は、受動(passivity)と情熱(passion)に支えられる理性として、哲学を生活の中から蘇らせる。

スタンディッシュとカベルの「自己を超え」る過剰な思考は、「自分探し」に象徴される内省的な個や、悪しきアメリカ個人主義として批判される利己主義的な個とは異なる。むしろそれは、ニーチェに影響を与えたエマソンの「思考する＝人間」(Man Thinking) (Emerson 2000, p. 44)が達成し続ける自由——「魂の鋭敏さと強靱さ」(p. 253)に支えられる完成主義的な自由——の概念に象徴される「レジリアンな個」である。これを起点にして、「最も内なるものから最も外なるものへ」(p. 132)

と完成され続ける民主主義社会が構想される。(ここでの「レジリアンス」は、「教育としての哲学」の立場から思考と言語を通じた個々の人間の内側からの再生力として提示されるものであり、その意味で自然の回復力や社会資本としての共同体の復興力などとの関連で提起される「レジリアンス」概念とは区分される(cf. Zolli and Healy 2012)。) 政治的次元に言語を媒介にした超越経験を回復し、同時に超越経験を脱政治的な私的領域にとどめることのない過剰な思考は、「承認の政治学」に代わる「内側からの民主主義」という代替的な政治性のルートを築くものである。それは、リベラリズムの自律的主体とコミュニタリアニズムの共同体的自己の従来の議論の土壌を超えるところに、第三の主体を置き直す。互換性に基づくコンセンサスや危険管理の過程で、平均值的発想や平等思考を脅かす社会の逸脱的要素は、見えないもの、語りえないもの、異質なものとして忘却されてゆく。これに対し、第三の主体によって完成され続ける共同体は、共生や連帯の言語に回収されないかたちで、単独性を背負った者どうしが共に生きる社会を志向し、「異人」と「偉人」を受容する民主主義社会をポスト近代社会のビジョンとして標榜する。

参考文献

- Beck, Ulrich. 1992/1986. *Risk Society: Towards a New Modernity*. Trans. Mark Ritter (London: SAGE publications Ltd) (邦訳『危険社会：新しい近代への道』(東 廉、伊藤 美登里) (法政大学出版局 1998)) .
- Cavell, Stanley. 1989. *This New Yet Unapproachable America: Lectures after Emerson after Wittgenstein* (Albuquerque, NM: Living Batch Press).
- Cavell, Stanley. 2005. *Philosophy the Day After Tomorrow* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press).
- カベル、スタンリー (2005)『センス・オブ・ウォールデン』(斉藤直子訳) (法政大学出版局) (Stanley Cavell, *The Senses of Walden* [Chicago: The University of Chicago Press, 1992; The Viking Press, 1972]).
- Emerson, Ralph Waldo. 2000. *The Essential Writings of Ralph Waldo Emerson*, (ed.) Brooks Atkinson (New York: The Modern Library).
- 村田純一(1996)『技術の倫理学』(丸善出版)
- 村田純一(2013)「日常性の意味転換」(『自己を超えて』: 哲学のサブジェクト転換) 日本哲学会 公開ワークショップ (2013年5月12日、お茶の水大学))
- スタンディッシュ、ポール(2012)『自己を超えて：ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』(斉藤直子訳) (法政大学出版局)
- Standish, Paul. 2012. “Pure Experience and Transcendence Down.” In *Education and the Kyoto School of Philosophy: Pedagogy for Human Transformation*, (eds) Paul Standish and Naoko Saito (Dordrecht: Springer).
- Saito, Naoko and Standish, Paul (eds) (2012) *Stanley Cavell and the Education of Grownups* (New York: Fordham University Press).
- Zolli, Andrew and Healy, Ann Marie. 2012. *Resilience: Why Things Bounce Back* (Free Press).